

《第62回 演奏会実行委員長 紹介特集号》



第62回演奏会の実行委員長を務める

栗山穂波（くりやま・ほなみ）さん

ニックネーム：ほーちゃん

パート：ソプラノ

「派手に体を動かせない分、歌声でかっこよく！をモットーの舞台にしたい」。コロナ禍の中、原則無観客ライブ配信となった第62回演奏会の船頭として、乗員が70人を超える「木曜会号」の舵を取る。

演劇に興味があり、京都産業大学で劇やダンスを採り入れると聞いていた混声合唱団「ニポポ」の門を叩いたのが、合唱人生のスタートライン。卒業後、同じように歌って踊る木曜会の演奏会を見て、自分も踊る側の団員になるのに時間はかからなかった。

一昨年の演奏会の前日、リハーサル直前に前実行委員長からバトンを渡すことを「通告」され、頭が真っ白に。「衝撃で心が崩れ落ちた」。さらに新型コロナウイルスの感染拡大で昨年の演奏会が延期。「なぜ自分の時に」と目の前が真っ暗に。だが座右の銘が「心はご機嫌」という持ち前の明るさで、「なかなかできない経験」と開き直った。

歌うこと自体が敬遠されるような時代の中、会場は木曜会のホーム、八幡ホールでライブ配信へ。目の前に満席の観客はおらず、木曜会の売りである多彩な演出と動きをする第3ステージは難しいが、「だからこそ、隣前後の仲間の存在を意識してほしい」。2016年の入団以来、初の重責。コロナ禍の中、難しい舵取りを迫られるが、思い入れのある「This is me」や「Sing Out」が、「団員だけの本番でどう響くのか」わくわくしているという。

職場の要請などで参加を見送らざるを得ない団員も出てきそうだが、「一緒にいるつもりで歌う」。木曜会号は、新しく仲間になってくれた新人さんも含めて常に一心同体。「演奏会までともに駆け抜けよう！」。

合唱以外はカメラや読書を楽しむ。ニポポで出会った旦那は山口県に単身赴任中。休暇で帰ってくるのを京都で首を長くして待つ28歳。京都市山科区出身。

（文責：おさやん、取材協力：ほーちゃん）